

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## マンディンゴ

1975年/アメリカ映画

配給：マーメイドフィルム、コピアポア・フィルム/127分

2021（令和3）年6月3日鑑賞

シネ・リーブル梅田

### Data

監督：リチャード・フライシャー  
原作：カイル・オンストット『マンディンゴ』小野寺健訳、河出書房刊  
製作：ディノ・デ・ラウレンティス  
出演：ジェームズ・メイソン/スーザン・ジョージ/ケン・ノートン/ベリー・キング/ブレンドン・サイクス/リチャード・ウオード/リリアン・ヘイマン/アール・メイナード/ロイ・プール

## 👁️👁️ みどころ

『マンディンゴ』って一体ナニ？なぜ本作は「映画史上最大の問題作」なの？たしかに奴隷制度は米国の恥部だが、それを描いた『風と共に去りぬ』（39年）は大ヒットなのに、なぜ本作はそうなの？

クエンティン・タランティーノ監督の“再評価”のおかげで、そんな問題作が46年ぶりにスクリーンに復帰したことに感謝！黒人処女の扱いから“嫁とり物語”、“妻妾同衾”、優秀なマンディンゴを従えての故郷への凱旋。そう続いていく物語はスリルと面白さでいっぱいだ。

さらに、後半は新妻は処女？を巡る騒動から、黒人女の妊娠、妻の妊娠と最悪の事態が続くが、いやいや、事態はもっと最悪に！こりゃ面白い！こりゃ必見！再度、クエンティン・タランティーノ監督に感謝！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■映画史上最大の問題作が46年を経てスクリーンに復活■□■

本作のチラシの表には「映画史上最大の問題作、46年のときを経て、ついにスクリーンに復活！」と書かれている。しかし、その裏には「1975年の公開当時、その過激極まる内容からセンセーションを巻き起こした呪われた大作がデジタルリマスターでリバイバル・ロードショー！」と書かれている。また、ネット資料によれば、本作は「最悪の映画！」、「アメリカの恥さらし！」とまで酷評され、マスコミに黙殺、映画史から消されてしまった作品らしい。ところが、クエンティン・タランティーノ監督が本作を「これはすごい映画だ」と評価し、本作にインスピレーションを受けて『ジャンゴ 繋がれざる者』（12年）（『シネマ30』41頁）を監督したと表明したことによって、じわじわと本作が再評価されるようになったらしい。

本作のチラシには印象的なポスター画が載せられており、そこでは本作のいくつかの代

表的なシーンが描かれている。そこでとりわけ大きく目に付くのは、①若い黒人女性を両手で抱いた若い白人男性の絵と、②白人女性を抱こうとしているほとんど裸のたくましい黒人男性の絵だ。また、その右下には、③煮えたぎった大釜の中からはい出ようとする黒人男性を、白人男性が農業用フォークで突き刺そうとしている絵もあるから、これもすごい！これは一体ナニ？

「映画のベスト100特集」をすると、必ずそのトップ1に君臨するのが『風と共に去りぬ』（39年）。同作での名シーンの数々はくっきりと頭の中に残っているが、このチラシの絵は、それと一見似ているようで、全く異なるものだ。本作の原作もベストセラー小説だったそうだが、ハリウッドではだれも映画化しようとしなかったらしい。そんな本作の製作に乗り出したのはイタリアのプロデューサー、ディノ・デ・ラウレンティスだが、監督は『海底二万哩』（54年）や『ドリトル先生不思議な旅』（67年）、『トラ・トラ・トラ』（70年）のリチャード・フライシャーだから、『風と共に去りぬ』と同じように大ヒットしても全然不思議ではないはずだ。そんな問題作が46年のときを経て、遂にスクリーンに復活！したのは嬉しい限りだが、なぜ「呪われた大作」なの？そもそも、タイトルの「マンディンゴ」とは一体ナニ？

## ■中国には纏足が！米南部の奴隷牧場での黒人の処女は？■

いろいろな小説を読み、歴史を知ると、いろいろな習慣を知ることができる。子供の頃の私がパール・S・バックの小説「大地」（31年）を読んで知ったのは、昔の中国にあった“纏足”という習慣。また、2012年にノーベル文学賞を受賞した中国人作家、莫言の『紅い高粱（コーリヤン）』や『豊稔肥臀（上）・（下）』、『白檀の刑（上）・（下）』、『四十一炮（上）・（下）』、『蛙鳴（あめい）』等を読んでいると、至る所に「オンドル」の描写があるが、これも寒い中国東北地方特有の習慣だ。アメリカは1783年の英国との独立戦争に勝利して独立したが、『風と共に去りぬ』で描かれたように、奴隷制を主要な争点として「南北戦争」（1861年～1865年）の悲劇を体験することになった。

本作の時代は、南北戦争が始まる直前の1841年。舞台は大陸南部のルイジアナ州だ。『風と共に去りぬ』も、ヴィヴィアン・リー演じるヒロイン、スカーレット・オハラの父親はジョージア州のアトランタ郊外で多くの黒人奴隷を使って大農園を経営していたが、そんなオハラ家と本作のマクスウェル家との異同は？それはいろいろあるが、その1つは、マクスウェル家の当主・ウォーレンが経営するファルコンファースト農園は“奴隷牧場”でもあったことだ。農場主の息子、ハモンド（ペリー・キング）への世代承継と、初孫の誕生を期待する当主のウォーレン・マクスウェル（ジェームズ・メイソン）は、農場経営の実務をハモンドに委ねていたが、本作導入部では黒人処女の扱い方を伝授する父子の姿が描かれるので、それに注目！ウォーレンの言葉によれば、「我が農場では14歳を超えて処女の黒人女なんぞおらん！」そうだ。それは、性交可能な年齢になった奴隷女の処女はすべてウォーレンが奪っていたためだが、今回の黒人の処女だけは息子のハモンドに譲る

らしい。ちなみに、モーツァルトの歌劇『フィガロの結婚』では、“初夜権”を巡って女性の処女性が面白く描かれているが、本作冒頭もそんなストーリーで盛り上がる(?) ことに・・・。

## ■□■ “嫁とり” 物語の展開と首尾は? 付録(?) にも注目! ■□■

大河ドラマには織田信長がよく登場するが、そこでは必ず信長が“嫁とり”のため、「マムシ」と呼ばれた美濃の斎藤道三の稲葉山城に赴くストーリーが描かれる。そこでは、世間で「うつけ」と呼ばれていた信長の“真の値打ち”を見抜いた道三が、濃姫の嫁入りを承知すると共に、「いずれ自分の息子・斎藤義龍は信長に征服され、美濃は信長のものになるだろう」と予言するくだりが面白い。それに対して本作では、「孫の顔を早く見たい」、「そのためには、お楽しみ用の黒人女ではなく（とは別に、正式の妻を娶れ」と父親から言われて、白人女性を娶るべく、ハモンドが叔父・ウッドフォード（スタンリー・J・レイエス）の経営する農園に出向いていくシークエンスが描かれる。

ウッドフォードの娘・ブランチ（スーザン・ジョージ）を娶るためのこの行動は、南北戦争直前のアメリカ合衆国での一種の“お見合い”だが、父親は立ち会わず、嫁選びをハモンドの判断に任している点が面白い。もともと、ウォーレンは、ウッドフォードの娘を気に入ってハモンドが結婚すれば借金を帳消しにし、気に入らなければ借金を取り立てるつもりだから、何ともがめつい限り。何よりも本作がいやらしいのは、ウォーレンもハモンドもそれを少しも変だと思っていないことだ。

本作が「最悪の映画!」、「アメリカの恥さらし!」と評されていたのは、導入部での①黒人女性の処女ゲット物語と、②白人女性の“嫁とり”物語を見ただけでも明らかだ。さらにこの“嫁とり”の物語でも、ハモンドはブランチを気に入ると同時に、ウッドフォード家の奴隷女、エレン（ブレンダ・サイクス）も気に入る、これも（彼女も?）1500ドルで買い取って一緒に連れて帰る始末だから、アレレ。ここまでくると、最悪というより少しユーモラスな気持ちになってくる。さらに驚くのは、濃姫が処女だったことは100%間違いないことだが、本作のブランチは「え、嘘だろう?」、「そんなバカな」と誰もが考える設定になっていることだ。本作には、そんな重要な設定（伏線）があるので、それにも注目!

## ■□■ マンディンゴとは? ■□■

日本ではハイセーコーやディープリンパクト、キタサンブラック等の競走馬にまつわる伝統が色々あるが、そもそも、競馬に登場するサラブレッドとはナニ?そして、本作のタイトルになっている「マンディンゴ」とは一体ナニ? ネット情報によると、マンディンカ族は、文化的にサハラ砂漠をまたいで中東から西アフリカにかけて行われたサハラ交易を支配したマリ帝国の子孫とのこと。そして、「マンディンゴ」とは、いわば黒人奴隷のサラブレッドのことだ。しかして、本作では、“嫁とり”と“側室取り”の両方に成功したハモンドが、奴隷牧場を経営する父親の夢であった優秀なマンディンゴ獲得のために奮闘した

結果、4500ドルでたくましい黒人男、ミード（ケン・ノートン）の競り落としに成功するので、それに注目！

黒人奴隷を主人公にした悲しい物語は『アンクル・トムの小屋』をはじめたくさんあるが、そんな物語に必ず登場するのが、奴隷を競り売りする奴隷市場。そこでは、男女を問わず、年齢を問わず、さまざまな用途に使うべくさまざまな奴隷が競り売りされているが、純血なマンディンゴ族を売りにした黒人奴隷・ミードの最大の売りはたくましさだ。ウォーレンから優秀なマンディンゴ族の獲得を熱望されていたハモンドは、ミードに色目をつけた白人のおばさんとの競りに勝って、ミードの競り落としに大成功。

この成果にはウォーレンも大喜びだが、帰り道にハモンドが立ち寄った売春宿ではハプニング的にミードの格闘才能が発揮されたから、さらに大喜びだ。『風と共に去りぬ』でも色男で遊び好きの男、レット・バトラーは親友の女性が経営する売春宿に通っていたが、同作中盤にはその売春宿を舞台にしたちょっとした事件が登場する。そこでは、スカレットが最も信頼する友人であるメラニーの機転で重大な危機を脱出することができたが、レット・バトラーと違い、真面目で妻一筋のメラニーの夫、アシュレーもなぜ売春宿にいたの？ さすがに新妻のランチを自宅に連れ戻っている最中のハモンドが売春宿で遊ぶわけにはいかなかったようだが、本作ではハモンドから外で待っているように言われていたミードが、店の警備員の黒人に見とがめられたため、そこでひと騒動が発生。大きな物音に驚いた売春宿の経営者、従業員、お客たちが飛び出してその喧嘩ぶりを見ていると、ある客が「勝った方に5000ドル！」と宣言したため、黒人同士の喧嘩は本格的格闘に。しかしてその勝者は？ 大金を示してミードを譲ってくれと言われたハモンドは、断固それを拒否。これにて、ミードはハモンドの忠実な奴隷兼ボディガードになることに……。

## ■□■新妻は処女？非処女？それが問題！あわや成田離婚に！■□■

新妻は処女だったの？それとも非処女だったの？それは、どうすればわかるの？あるいは、その誤魔化し方は？そんな“論点”を巡る面白い小説はたくさんあるが、本作のランチは、何と子供の頃に1度だけだが、実の兄とエッチした経験があるらしい。もちろん、本人はそれを認識していたから、ウッドフォード家まで“嫁とり”にやってきたハモンドを初夜の床に迎える時は、緊張もしただろうし、何らかの誤魔化しをしたのかもしれない。ところが、床入りまではあんなに熱かったハモンドの態度が、床入り後は急速に冷めてしまったから、アレレ……。ランチはハモンドのことを甘く見ていたのかも知れないが、ハモンドは黒人女の処女破りを得意とする父親の跡を継いだ男だから、“その方面”の能力もすっかり鍛えていたらしい。しかして、ハモンドが頑なに初体験を否認するランチを許せなかったのは当然だ。ひょっとして、ハモンドが黒人奴隷のエレンを気に入ったのは、そんなランチへの“腹いせ”があったのかもしれない。こんな事態が続けば、あわや“成田離婚”に！？

そんな展開も仕方なし。そう思っていると、ランチをファルコンファースト農園に連

れ帰った後のハモンドの行動は？山崎豊子のヒット小説『華麗なる一族』（80年）では、一大コンツェルンを築いた男、万俣大介の“妻妾同衾”の姿が描かれていたが、ウッドフォード家でのブランチの“嫁とり”を終えて、マンディンゴのミードと“側室”のエレンを従えてファルコンファースト農園に凱旋したハモンドは、以降ブランチのベッドには寄り付かず、せつせとエレンとのエッチに励むことに。こうなると事態は“成田離婚”以上にマズいが、その行きつく先は？

## ■□■黒人女が妊娠！女の嫉妬は？その仕返しは？■□■

私の弁護士稼業は50年近くになるから、その間に扱った離婚事件も多い。本来、夫婦喧嘩は夫婦だけで解決すべきものだが、そこに弁護士が介入するメリットは、それによってやっと“合理的な割り切り”ができる可能性が強まることだ。

南北戦争直前の米国の離婚事情や弁護士事情は知らないが、本作には弁護士は登場しないし、ハモンドは新妻・ブランチの処女性を巡る問題点を父親に相談していないから、事態は悪化の一途をたどっていたようだ。もっとも、それは夫が全然自分のベッドに来てくれないブランチ側の言い分で、ハモンドの性欲解消は黒人女のエレンで十分だったらしい。そうすると、すぐに導かれる事態は、エレンの妊娠。そして、それがブランチにわかると、ブランチの嫉妬心の行き先は？そのやり口はスクリーン上でしっかり確認してもらいたいが、夫に抱かれることのない新妻の仕返しは、なんとミードの誘惑だ。ブランチのそんな意図を知ったマクスウェル家のベテラン黒人執事は何とかそんな無茶を止めようとしたが、ブランチが命令すれば、ミードはそれに従わざるを得ない。その上、ブランチから心地よいことをされると、まるでスクリーン上はかつての宇能鴻一郎の官能小説のようなシークエンスが。その結果、こちらも自然の摂理、神の摂理に従って、ブランチは妊娠。ブランチは夫の子だと主張し、出産に臨んだが、さて、生まれてきた赤ん坊の肌の色は？ここまで事態が進めば、最悪も最悪。出産に立ち会った医師や奴隷たちは、赤ちゃんを闇から闇に葬り去ろうとしたが、さて、コトが露見してしまうと？

## ■□■主人公の復讐は？こりゃ最悪！いやいや、更に最悪！■□■

新妻が処女ではなかったため2度とそのベッドに向かうことがなかったにもかかわらず、妻が、黒い肌の赤ん坊を出産。そんな事態に直面した主人公・ハモンドが取った行動は？その復讐心の方向がブランチに向かわなかったのはなぜかよくわからないが、スクリーン上ではミードに向かった嫉妬心が、煮えたぎる大釜を巡って展開されるので、それに注目！それがチラシの絵に描かれていた風景の1つだが、いくらご主人様に「ゆで釜の中に入れ」と命じられても、人間そんなことができるものではない。石川五右衛門はムリヤリゆでた大釜の中に入れられたから、そこで往生したが、さあ、スクリーン上の展開は如何に？ハモンドが農業用フォークを使ってミードをムリヤリ煮えたぎった大釜の中に入れようとするシークエンスを見ていると、それが最悪の事態と思われたが、イヤイヤ、スクリーン上はもっと最悪の事態に。それはあなた自身の目でしっかりと！

なるほど、本作はこんな映画。こりゃ、ある意味「最悪の映画」と言われても仕方がない。しかし、これは面白い。

2021（令和3）年6月14日記